

平成23年(ワ)第1291号、平成24年(ワ)第441号、平成25年(ワ)第516号、平成26年(ワ)第328号 伊方原発運転差止請求事件

陳 述 書

立川 百恵
(松山市在住)

私は、大学で社会福祉を専攻し、卒業後、日本ではまだ二つの病院でしか取り入れていなかったメディカルケースワーカーとして働きました。しかし、子供を育てる段になって、保育をしていただけたところがなく、やむなく退職し、主婦業に専念しました。その中で、地域生活協同組合にかかわり、コープえひめの理事長を18年間勤めました。上部団体の愛媛県生活協同組合連合会の専務理事・副会長、また、日本生活協同組合連合会の理事などにも就任し、今は、愛媛県生活協同組合連合会の顧問をしています。

私が、3人の子供を育てたのはちょうど経済の高度成長期でした。当時、科学技術の発達は目覚ましく、化学物質が食品添加物や農薬に大量に使われ始めました。幼い命をはぐくむ立場では、はじめて使われる合成化学物質が子供たちの体にどんな影響を与えるのか、不安が増しました。同じ思いの母親は多く、皆で勉強し、なるべくそうしたものを使わない食品を求めて生産者を探し、共同仕入れをし、分け合いました。やがて仲間が増え、生活協同組合として「安心できる食品」を求めていきました。ちょうどそのころ、チェルノブイリの原発事故が起こり、イタリアから輸入していたスパゲティが原料汚染で輸入できなくなりました。地球の裏側で起きた事故で、私たちの食糧まで影響を受ける、原発事故の怖さを感じました。

そして東北地方の大地震です。まず、思ったのは原発は大丈夫だったのかということでした。やがてニュースから知る津波の壮絶な様子、その中で次第に原発の被害が伝わりました。何と大変なことでしょう。言葉を失いました。科学の粋を極め、原子力の平和利用と国民が思い込んでいた原発のもろさ、ひとたび環境へ流れ出した放射能は制御不可能なこと、地球上のすべての人類が被害を受けること…、これまで心の片隅にしこりのように不安を感じながら、漠然と大丈夫だろうと受け流していた愚かさに、頭を強打された思いでした。小さい子供を抱えたお母さんたちは、計り知れない放射能の子供への影響におびえ、逃げ惑うことになりました。できるだけ遠くへ、少しでも汚染の少ないところへ、見えない物質との戦いです。この子の成長過程でどんな影響が出るのか、長い将来のことだけに、また、だれもが確実な回答を持ってないことだけに、お母さんたちの不安は想像を超えるものでしょう。それ以降、日本でも、原発に関する情報が急速に報じられるようになり、国民の多くが改めて狭い地震王国の日本に多くの原発が林立している事実を思い知らされました。

愛媛県の伊方原発は、佐田岬半島の付け根に位置しています。有名な中央構造線が近くを走っています。4月には地震が少ないといわれていた九州熊本を中心に、新しいタイプの地震が頻発しています。日本中いつ、どこでもこうした地震が起きてもおかしくない状態にあるといわれ、日本は地震の活動期に入ったといわれています。国民誰もが、地震を身構えた生活に入っているといってもいいかと思います。3月、私は八幡浜からフェリーで大分へ渡りました。港を離れてから延々と続く佐田岬半島を眺め、改めて日本一長い半島の距離を実感しました。また、今年の連休には帰省した娘たちを伴って、佐田岬半島の先端まで車を走らせました。昔は197号線は、イチ、キュウ、ナナの語呂あわせで「行くな道路」と言われていた悪路だったことなど話しながら、途中の集落に降りてみました。197号線は整備されていますが、岬へ続くそれぞれの集落は孤立し、登り降りは大変な道のりです。半島に約5千人暮らしておられる住民は、高齢化していると聞きます。それぞれの地域で、いざ原発に何かあったら、どう対処できるのでしょうか。自宅待機しかないとの意見もあります。しかし、大きい地震が発生すれば家も崖も崩れるのです。汚染された空気をよけて、室内で過ごすことなど無理でしょうし、室内に居ては家屋の倒壊で死亡する恐れもあります。

船で、大分へ逃げる訓練も行われました。地震や津波の後で船は港につけるでしょうか、十分な数の船が調達可能でしょうか、受け入れる大分は地震に見舞われてはいないのでしょうか。半島の付け根にあるという立地条件は、陸伝いに逃げる道が閉ざされます。改めて、半島の地図を眺め、そこに生活する人たちの居住環境を知ると、この人たちの命とくらしを守ることは並大抵ではないことを思い知らされます。ひとたび事故が起きた時は、打つ手がないことになるのではないのでしょうか。

福島の事故以来、私たちは節電にも努め、一般家庭の電気使用量は減っています。家電製品も技術開発で節電型になり、電気の恩恵を感じながら暮らしの見直しも始めています。太陽光発電、風力発電も進みました。新しい家々の屋根は太陽光発電のパネルが広がっています。佐田岬半島の風力発電の林立は見事です。四国電力は原発が3基とも止まって以来、夏の需要ピーク時も乗り切ることができました。十分な供給ができています。それなのに何故、人々の命の危険性を差し出してまで3号機の再稼働を進めるのでしょうか？経済効果とは何でしょうか。儲かるとはどういう計算でしょうか。万が一事故が起きた場合の後始末は、計算に入っているのでしょうか。トイレのないマンションと言われる最終の跡片付け費用は計算されているのでしょうか。主婦は、子育ての時も、介護の時も、命を考え、常に後始末のことを考えながら暮らしています。ごみ処理は大変な問題なのです。そのことの手当もないままに事を始めることなど考えられません。今さえ良ければいい、やりっぱなしで、あとのことは考えない。こうした無謀な政策・計画を認めることはできません。なぜ、3号機を稼働させなくてはなら

ないのか。その理由を丁寧に聞かせて下さい。

私たちは、この大自然を大切に、平和で穏やかな暮らしを求めています。豊かな海の海産物、太陽を受けた大地の恵みに感謝し、この瀬戸内海、豊後水道に囲まれた穏やかな土地での生活を限りなく愛しています。佐田岬半島から望む海や山の景色は、そこで育てられた海産物、農産物とともに私たちの宝です。こうした豊かな自然の中で子供を育てられたことに感謝しながら、次の世代にこの豊かさをつなぎたいと思っています。それは今を生きる大人たちの責任として、次世代へ受け継ぐものだと考えます。

エネルギーの大転換が世界で模索されている中で、福島での事故の多くの問題を十分検証することなく、再稼働に踏み切る理由は何でしょう。時代錯誤というべき政府の政策に事業者は、関係するすべての人たちは本当に納得しているのでしょうか。地震多発国の日本が大きな犠牲を払って原発事故の恐ろしさを世界に知らしめたではありませんか。そこから学んだものは何だったのでしょうか。今すぐ、すべての原発を廃炉にしたとしても、その後始末には多大な費用と、多くの人々の労力、長い年月が必要です。一代で済む仕事ではない過酷で深刻な作業です。今は、再稼働など考える時ではなく、一刻も早くどう後始末をするか、そのことに全力を尽くすべきだと考えます。

平和と暮らしを守ることをモットーにしている生協では、広島・長崎の原爆被害、太平洋上での水爆実験による漁業者の被害を重く受け止め、核廃絶運動を粘り強く進めてきました。核をエネルギーとして使う原発も同じ被害を生み出します。事業所設置が住民の避難訓練を必要とする事業などありえないはずです。核と人間は共存できないことを改めて確認する必要があります。

私は、国民学校1年生で敗戦を迎えました。したがって、新憲法の下で教育を受けることができました。日本の国の運営は、三権分立の下、民主的に行われることになっています。今、伊方原発の再稼働には多くの住民が反対しています。大分への避難訓練は実施した後、参加者が即座に「無理！」と答えています。にもかかわらず、伊方町議会や町長、愛媛県議会や知事は再稼働に同意してしまいました。この状況下では裁判所が頼りです。どうか、私たち生活者の意見をお聞きください。そして、未来につながる判決を下していただきますよう心よりお願いいたします。